

学習院大学送別会挨拶

松島 正一

文学部退職者の会での挨拶

昨年は大震災でこの会は中止となり、3月30日に文学部の各研究室の新旧交代の会と一緒に行われました。そのことを思うと、昨年ご退職の先生方には申し訳ないと思うと同時に、今年はこの会が開けたことを嬉しく思っています。

日本美術史の小林忠さんは私より1年前に学習院にきましたから、文学部で私よりも古い方は、哲学科の新川哲雄さん、史学科の高埜利彦さん、仏文の岩崎浩さん、教職の諏訪哲郎さん、それと英文の橋本楨矩君の5人だけ（教職の齋藤さんは私と同じ年）になってしまったと思います。

小林忠さんとは大学の卒業は一緒のはずですが、学生時代には面識はなく、学習院に来てからのお付き合いです。小林さんはこれからもお仕事があるようで結構なことです。

私のように英文学など外国のことをやると、いつまでたっても偉くはなれませんが、小林さんのように日本美術史など日本のことをやると、世界一になれるわけで羨ましく思います。我々の頃、失礼ながら、美術史に進学するのは1人か2人であったのではないのでしょうか。小林さんには先見の明があったのだと思います。

停年後にもお仕事がある小林さんと違って、私は特に何もやることはありません。字でも書こうかと思っていますので、今日は硯入れと落款を戴きました。落款は4文字が1単位のように、それ以上は1文字7千円とかです。4文字彫ってもらいました。さあ、なんという言葉を彫ってもらったとお思いですか。ブレイクにちなんで、右側に「無垢」と左側に「経験」という字を彫ってもらいました。

あと、子どもたちが家を出て行ってピアノを弾く者もいなくなりましたので、ピアノをこれから習おうかなどと考えていますが、どうなりますか。

ぼくは東京の葛飾は柴又の隣の金町という所に生まれ、小学校、中学は金町、高校は都立両国高校で、すべて山手線の東側で、山手線の西側は東大の駒場時代の2年間だけです。大学院を出て、國學院大学に17年勤め、それから学習院大学に移って来ました。非常勤講師をやったのも中央、法政、明治など、山手線の内側の学校で、山手線の西側の学校に行ったのは、津田塾の大学院に教えに行った2年間だけです。

勤め先が國學院大学と学習院大学しか知らない人生なので、國學院は神道、学習院は皇族の学校と思っている人は、ぼくを右翼、あるいは保守反動だと思う人がいるようです。ところが、國學院も、学習院も実にリベラルな大学なのです。昔のことですが、日本英文学会でシンポジウムの講師に上野千鶴子さん(まだ、京都の短大の教員でした)を呼んだことがありますが、ぼくが学習院の名刺を出したら彼女は、「えー、学習院」と仰天していましたが、ものを知らないにもほどがあります。学習院、特に文学部ほどリベラルな良い学校はないと思います。

今日は前学長の永田良昭先生を初めとして、我々より先にお辞めになられた先生方にもお越しいただき感謝しています。お元氣なご様子で嬉しく存じます。本日の世話役の鈴木健一さん、保坂良子さんのご苦勞にも感謝します。今日は本当に有難うございました。

(平成 24 年 3 月 16 日)

英語英米文化学科の歓送迎会での挨拶

今日は高輪プリンスホテルでの歓送迎会ということで感無量です。僕のゼミ生でプリンスに勤めている石井雄祐君が、英文の事務室にセールスに来て名刺を置いて行ったことで、ここで会をやることになったようです。石井君は卒論に *John Donne* をやったのですが、*John Donne* をやっとうまくいかなかった論文を *John Donne Undone* (暗澹たるダン) と言いますが、彼の論文は *John Donne Welldone* でした。

先程、感無量と申し上げたのは、実はちょうど 40 年前の 4 月にここで結婚式を挙げました。それ以来、菊華会会員として高輪だけでなく、プリンスホテルはよく使っています。

ぼくは 43 歳のときに学習院に来ました。本当に何にも知らなくて、学習院に来てしまいました。学習院の構内に入ったのも、1975 年に日本英文学会が開催された時に一度来ただけでした。この時にイギリス・ロマン派学会が発足しましたのでよく覚えています。学習院は自分には関係のない大学でした。橋本横矩君がいるのは知っていましたが、それほど親しかったわけではありませんでした。児玉久雄さんとイギリス・ロマン派学会で知り合いになりまして、一度非常勤に来ないかと誘われましたが、断ってしまいました。その時には須原和男君を非常勤に紹介しました。

ですから、児玉さんから学習院に来ないか、と言われた時は驚きました。給料が大幅に下がるので躊躇しましたが、工藤昭雄さんを尊敬していましたので、移ることにしました。ぼくはてっきり児玉さんが僕の名前を挙げてくれたものだと思っていましたら、来てから工藤さんが僕を呼ぼうと言ってくれたことを知りました。

同僚になった宮本陽吉さんから、学習院は内紛の多い大学として有名だったのでよ、という話を聞いて驚きました。北海道大学から柏倉俊三（昭和2年卒）が来たのも内紛を治めるためであったようです。さらには、齋藤^{ツグ}勇先生が非常勤でいらしたのも、そのためだったようです（工藤昭雄さんが助手で、齋藤先生のお相手をしたそうです）。

最後ですので、自慢話になるのは嫌なのですが、ぼくが提案して英文科でやったことをあげてみます。何か新しいことをやろうと思うと、先ず工藤さんに言って「そうか、いいだろう」という返事を貰ってから始めたのですが、いろんなことができたのは、工藤さんが背後に居て下さったからだと思います。

ぼくが来た頃はちょうど偉い先生方がお辞めになったところで、残った人たちがやつと大学院を教えるようになった時期になります。この世代の先生方に教え子（弟子）がいないのはそういうわけなのです。助手（現在の助教）もいませんで、副手が5人いました。

そのような雰囲気を反映して、大学院生は元気がありませんでした。そこで、学習院英文学会を開催し、研究発表をやるようにしました。私より年長の先生方は、工藤さんと、児玉さん以外にはほとんど出席して下さいませんでした。その時に主任であられた先生が、主任挨拶の時だけ出席してくれました。

学会を活性化すると同時に、すでにあった学習院大学英文科の学会誌を研究誌にしました。また、文学部年報委員になった時に、大学院の学生の論文も載せていた『文学部研究年報』を教員のみにし、その代わりに大学院生だけの研究発表誌である『人文科学論集』を作ったこと、これは委員会の功績ですが、言い出したのはぼくです。心理学科の斎賀教授が委員長として色々とお骨折りを下さいました。

博士課程修了者の就職を応援するために、彼らを学習院大学の英語の非常勤講師として平等に採用することにしたことも画期的なことでした。それまでは、先生方の好みで非常勤を決めていましたから、学生の間に不満がありました。まだ、外国語教育研究センターは出来ていなくて、英文科が一般教育の英語も扱っていた頃の話です。

東大の本郷の助手が非常勤講師として来ていましたが、それを止めさせたこと。自

分のところの大学院生よりも圧倒的に若い助手に教えさせて、自分のところの大学院生が博士課程を修了しても世話しない現実、正直言ってこれには腹が立ちました。

大学院担当は教授のみであったのですが、大橋洋一、岸田隆之などの優秀な助教授に教えさせないのは損だと言って、助教授も大学院担当にしたこと、英語学の分野では抵抗があり、完全な実現には時間がかかりましたが、現在の体制はここからきています。

余計なことを長々としゃべってしまいました。来た当初は酒を誘ってくれる人は工藤さんだけでしたが、塩谷君が来てからにぎやかになりました。ジャスミン（茉莉化）がなくなったのは残念ですが、これからも皆さん仲良くやって下さい。お世話になりました。では、さようなら。本日はどうも有難うございました。

（平成 24 年 3 月 19 日）

文学部教授会での挨拶

小林忠さんは私より 1 年前に学習院にきましたから、文学部で私よりも古い方は 5 人だけ（教職の齋藤さんは私と同じ年）になったと思います。

おもしろいもので、文学部の同僚であっても自分より後に来た人はその人の業績審査などで、その人がどんなことを研究しているか知っているわけですが、学科が同じでないと、自分より前からいる人は何が専門かわからないということがあります。その人が、安倍賞を受賞する、あるいは名誉教授に推薦される際になって初めて、その人の経歴を知るといったことがあります。辞める頃になって教授会のメンバーの方から、「松島先生はブレイクがご専門でしたか、私ブレイクが好きなのです」などと告白されても、嬉しい半面、何か腑に落ちない気持ちにもなりました。

退職にあたって、事務当局から「守秘義務に関する誓約書」を提出させられましたが、まだ辞めていないのでいいと思って話します。

文学部の先生のかなで、特に印象に残るのはやはり国語学の太田晋先生です。われわれの個人研究室のソファースセットは、北 2 号館が出来た時に太田さんが新潮社からもらってきたという伝説がありますが、高埜さん、本当なのでしょうか。

大学の駒場の同級生で国語学（『古事記』）をやっている友人がいて、彼から太田さんのことは、色々噂は聞いていました。例えば、友人は大学院に入った途端に、

指導教授の先生から大野さんの所にご挨拶に行けと言われ、行かないと岩波の『文学』には書けないぞと言われたそうです。僕は行きませんでしたよ、と彼は言っていました。どうだったのでしょうか。また、大野さんは学会ではいつも一番前に座って、若い発表者であれ誰であれ、発表者に質問を浴びせるとか、色々噂がありました。

ちょうど私が来た頃は、大野さんの日本語起源説が学会ではめっちゃめっちゃに叩かれていた頃でした。私が前にいたのは國學院大学でしたし、また英語学や言語に行った友人たちは大野説を問題外だと言っていました。

さて、大野さんのエピソードですが、大野さんが教授会で立ちあがると、「さあ何を言うか」と全員注目でした。今、西門周辺はとてもきれいになっています。西門を正門だと思っている人も多いようで、卒業式の日にはあそこで写真をとるために並んでいてびっくりしました。昔、管理課が西門およびその周辺の環境を整備したいと教授会で説明されたことがありました。大野さんは、学習院には立派な正門があるのだからそんな必要はない、西門は通用門で、駅に近いからみんなが利用するだけなのだ、とおっしゃいました。いつのまにか西門がきれいになりましたが、西門の周辺が現在のようになったのは、大野先生がお辞めになってからです。西門を通るたびに大野さんのことを思い出します。

また、こんなこともありました。法学部（政治学）にやっと博士課程ができて、最初に皇太子（今上陛下、現天皇）に名誉博士号を授与しようとしているという話が報告されました。大野さんはこう言って反対しましたね。「あの方が日本の政治のために何かをおやりになったとは、わたしは思いませんね」。大野さんは気骨のある方でした。

教授会でばくの発言が問題発言になりそうになると、隣の塩谷君が上着の袖を引っ張って止めると合図することがよくありましたが、今日は最後ですから、もう少し続けます。

入試課長が前田さんであった頃、（あのころは、前田とか、児玉とか、大久保とか、村田とか、そういう立派な御名前の爵位のある方々のご子孫がいらっしゃいました）、その前田さんに頼まれて、大野さん、数学科の赤尾和男さんと国語、数学、英語を代表して、3人で前田課長と一緒に河合塾のある名古屋まで出かけたことがありました。高校の教員を集めて、国語、数学、英語と分科会があり、そこで講演をするということでした。土日をかけて1泊、グリーン車、僕としては結構な講演料ももらいました。バブル時代の予備校、そういう出張でした。帰りの新幹線では、東京駅まで大野さん

と並んでの2時間で緊張しましたが、得難い経験でした。

大野さんから本居宣長のことなど、色々と貴重な話をお聞きできました。宣長の偉いところは60過ぎて、3つの大きな仕事をしたことだと、当時60代であった大野さんはおっしゃいました。大したことをやれなかった自分の60代を反省しています。

大野さんは深川の砂糖問屋の生まれですから、そしてぼくは両国高校（三中）ですから、大野さんにどうして開成にいらしたのですかとお聞きすると、一瞬、間をおいて「いや、一中を落ちたんだよ」とおっしゃりました。失礼なことを聞いてしまったと思いました。ところで、大野さんの開成の国語の教師の一人である板谷菊男先生は板谷波山の息子さんでしたね（荒川正明教授に質問する）。入試の委員をしていたころ、文学部全部の入試問題を見なければいけませんでしたので、国語の問題で、疑問の個所があって出題責任者の大野さんに質問すると、「これでいいのだ。君はこんなことも知らんのか」と言われ、「係り結び」の基礎を教えられたのも懐かしい思い出です。

文学部では、その他、仏文の辻邦生、白井健三郎、篠沢秀夫、山崎庸一郎、高木進、杉山正樹、豊崎光一さん、独文では早川東三、岩淵達治、村田経和、轡田収、下宮忠雄さん、國文では十川信介、吉田敦彦、諏訪春雄さん、歴史では安田元久、小倉芳彦、堀越孝一さん、哲学では加藤泰義、北嶋美雪、左近司祥子さん、心理の斎賀久敬、永田良昭さんなど、懐かしい先生方のことを話し出すときりがないのでやめます。

最後に一言だけ余計なことを言わせて下さい。資本主義はすべてのものが「売れなければならない」社会です。それに対して、何も「売らなくてもよい」社会を作ろうとしたのが社会主義です。社会主義はまさに売らなくてよいことによって、他者による批判を抑圧した独裁社会となってしまったのです。文学部は何も「売らなくてもよい」はずでしたが、今どきそんなことは言えないので、我々の英文科では「発信する英語を教える」などと言っています。文学部も「売れなければならない」ことになって色々と新しい改革が行われてきましたが、そもそも学習院の文学部の基本は哲学と歴史だと思っていますから（文学などはいいかげんなものです）、学習院の文学部は不滅だと思っています。

教授会では余計なことを言って、いろいろとご迷惑をおかけしたと思います。文学部の発展、というより継続を期待しています。どうも色々とお難うございました。

（平成24年3月30日）